ルポライター
滝川 康治

“農と食”北の大地から

連載第86回

創立の原点に立ち戻り 土臭さのある大学改革を

「校名変更問題」で揺れる酪農学園大学

「高大一貫教育」や学部の再編成などの学園改革を進める江別市の酪農学園大学（谷山弘行学長）が校名変更問題で揺れている。“酪農”の名称を外して入学者を確保しようとする経営陣と、「大学の歴史やブランドを喪失させる」と反発する教職員や卒業生ら――。論議の進め方をめぐる意見の違いもあり、今後にしこりを残す可能性もある。そんななか、理事者側は新しい校名として「北海道三愛大学」を提案した。賛否双方の声を聞き、教育内容を検証しつつ、50年におよぶ歴史を持つ大学の現状をリポートする。

野幌森林公園に隣接する広大なキャンパスに校舎や農場などがある酪農学園大学。全国から学生が集まるこの大学の前身は、日本酪農の父と呼ばれた黒澤酉蔵（1885～1982年）が昭和初期に創立した「北海道酪農義塾」であった。

「世界一流の酪農王国をこの日本につくろうと決心した酪農家が若い腕と心のしっかりした指導者を育てようとしてつくった学園」であり、「背広農民とか、農村に寄生するような人間を育てる学校ではありません」と、黒澤は著書『酪農学園の歴史と使命』で述べている。

そんな理想に基づいて酪農学園大が開設されてから半世紀。今、校名変更の是非が論議を呼んでいる。

学校法人酪農学園（麻田信二理事長）は二〇〇七年秋、大学改革の検討作業に着手した。傘下の「とわの森三愛高校」をリニューアルする一方、一一年度には大学の再編成を実施。これと併せて校名変更を検討してきた。「現在の名称では高校生に関心が持たれない」と、一月下旬の理事会で「北海道三愛大学」に変更する案が固まり、二月十日の評議員会に諮ることになった。

理事者側の取りくみに対し、一部の教職員や同窓生、学生から、「大学の歴史やブランドを喪失させる」「進め方が強引だ」などの批判が噴出。今後の推移によっては、双方にしこりを残し、大学教育にも影響が出ることが懸念される事態になっている――。

「三愛精神」と実学教育、大学共同体が教育方針

酪農学園大の歩みと校名変更の経緯を大まかにみておこう。

一九六一年の開学時、同大は酪農学科のみでスタートする（定員は100人）。応募者が多く、実際は全国各地から百八十人の若者が入学。『酪農学園史』によると、初代学長の樋浦誠さんは、「『神を愛し、人を愛し、土を愛する』の三愛精神」「実学教育」「教師と学生を主にした大学共同体の成立」の三つを大学の教育方針に挙げた。ある一期生は、「当時はクリスチャンの教職員が多く、わたしたちと寝食をともにする学校だった」と述懐する。

学園には後援会（初代会長は当時の町村金五知事）が組織され、酪農関係者から募金を集め、校舎や付属施設を整備した。だから、酪農業界や農協などとのつながりも深い。北海道の大地に根ざした教育機関という点で、ほかの私大にはないユニークな存在といえるだろう。

酪農学園が運営する短大と高校は校名変更をくり返したが、大学名は変わっていない。近年になり、獣医学部出身の谷山弘行学長が変更を主張したが、具体化しなかったという。

○七年、道副知事を退職して長沼町で果樹園を営む麻田信二さん（本連載07年2月号のインタビュー記事を参照）が、学園側に請われて理事長に就任。「三愛精神に基づく健土健民戦略本部」が設置され、学園改革に取りくむことになった。

学園改革のなか浮上した“酪農外し”の校名変更案

「改革」の第一弾は、大学に隣接する「とわの森三愛高校」を酪農学園大学附属高校として位置づけ、高大一貫教育を打ち出したこと。今年四月から、三愛高校の普通科に五コースを設ける一方、「酪農経営科」を「アグリクリエイト科」に改称し、通信制課程（普通科・単位制）を新設する。そこには、高大一貫によって学生を獲得し、きびしい経営状況を好転させようとの狙いがある。

第二弾は一一年度の大学の再編成。現在の三学部八学科を廃止し、「農食環境学群」「獣医学群」に分け、循環農学、食と健康、環境共生、獣医、獣医保健看護の五学類（13コース）を設置。入学定員を八百二十五人から七百人に削減。学科同士の垣根を低くして、学生の選択の幅を広げる――という計画を進めている。

再編に向けた検討作業のなかで浮上したのが、校名変更をめぐる論議だった。酪農学園常務理事の仙北富志和さん（環境システム学部教授）は、変更の主旨をこう説明する。

「現状では、三愛高校の収支は赤字であり、今度は本家（大学）が危ない。最盛期に三十倍ほどだった獣医学部の競争率が近年は五倍前後。ほかの学部は一倍前後にとどまり、真綿で首を絞められている状況です。対応が後手に回ってきた。当初の大学改革のスケルトン（骨組み）では校名変更は外れていたが、わたしは、『定員が多いままではまずい。変更も聖域ではない』と主張してきました。学生募集のターゲットは都市部の高校生。農業よりも狭い分野（酪農）の看板を掲げながら、教育内容は農業よりも幅が広いのでは理解されません。特定業界の振興機関としては（開設から）五十年が一つの節目ではないか」

酪農学園大の一期生でもある仙北さ

酪農学園の文京台キャンパスは総面積132haと国内トップクラスの広さで、校舎や畜舎、農場などがある。
2011年度に看板から「酪農学園」の文字が消えるのか……

んは当初、校名変更について悩んだが、大学の現状を踏まえ、「やむを得ない」と判断したという。

教員有志から批判が噴出 理事者側との溝が深まる

昨年六月、変更の理由を記した理事長名の文書が教職員に配布された。

①ごく狭い業界の名称のみを大学名に用いるところはほとんどない

②開設時は一学科から始まったが、現在は八学科まで充実し、大学の名称と教育内容に開きがある

③設置時に比べ酪農家戸数が大幅に減少し、大学に関心を持つ対象を広げる必要がある

④名称変更により、新たな層からの志願者の獲得が期待できる

という内容だったが、学内から反発の声が上がった。七人の教員が発起人になり「校名変更を考える会」を立ち上げ、次のように反論した。酪農学園の一部評議員による反対表明もなされている。

❶業界名だけを名称にして長く続く大学は、それだけ世の中に認められている証だ

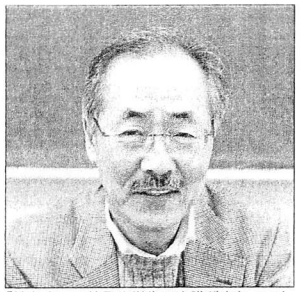
❷教育内容が大学の理念に合致しているか、まず検証すべき

❸農家出身の学生の比率は低く、戸数の減少による影響は大きいとはいえない。これを理由にした名称変更は、酪農家に対する背信行為だ

❹新たな層からの志願者獲得によって、本学の役割に対する学生の意識の低下が避けられない

「考える会」の発起人で同大大学院酪農学研究科長の干場信司さんは、理事者側の対応をこう批判する。

「真っ当な理由があれば反対しないが、(理事者側は)経営のことを言うだけで、『酪農をなくせ』という方向になっている。牛舎に行って『臭い!』と反応する学生が増えれば、今でも乏しい農業に対する意識がもっとなくなるでしょう。校名変更で教員や学生の意識が変わると(教育面で)大学はつぶれてしまう。安易に変えず、建学の理念に沿って健土健民や循環農業を徹底する道を追求すべきです」


「校名変更で教員や学生の意識が変わってしまう」と危惧する干場信司さん

学内での合意形成の進め方に対する反発もあるようだ。

昨秋、前出の文書について詳しい説明がないうちに、麻田理事長の見解が業界紙に載った。理事者側が全学教授会で説明し、議論したのはその後のこと。「内部で議論せず、なぜ先に業界紙に見解を出すのか」と干場さんは憤る。酪農学園職員組合も昨年暮れ、校名変更を危惧する声明を発表した。

そこで、麻田理事長に「議論不足」の声に対する見解を聞くと、「自分たちの意見が通らないと、そんなことばかり言う。彼らの反対理由に建設的なものは一つもない」と、剣もほろろの答え。第三者のわたしは、「互いによく話し合ったらどうか」と思うが、双方ともやや感情的になっており、溝は深いようだ。

同窓生のなかに反発の声 理事者にきびしい意見も

酪農学園を卒業した人たちは全国各地で暮らし、母校とのつながりが強い。同学園の後援会から同窓生に『酪農学園だより』が定期的に送られ、卒業生や旧教職員が母校に集って旧交を温める「ホームカミングデー」の催しも続いてきた。

昨秋以来、慣れ親しんできた校名が変わることに対し、インターネットによる署名運動が実施されるなど、同窓生の間に反対の声が広がった。同学園同窓会連合会札幌支部のように反対決議をしたところもある。

「建学の初心に戻るのが改革であり、目先の対応策では学園改革はうまくいきません。歴史を捨てて、なんのメリットがあるのか。校名を変更しても、そう簡単に世間に周知できず、名前だけで学生はやってこない。彼らは教育内容をみて入学するのです。

理事者側の覚悟のほどを問いかける同窓生で札幌支部長の紺野勝歳さん

黒澤酉蔵らは学園をつぶさぬ覚悟で臨み、今以上の危機もあった。わたしは長年、雪印に勤めたが、当時の佐藤貢理事長(雪印乳業社長などを歴任)は教職員の給料が払えないとき、会社にきて金を工面していた。そうしたことをやって学園の基礎を築いてきたのです。(麻田理事長らに)校名変更で失敗したら責任をとる覚悟はあるのか」

と、同連合会札幌支部長の紺野勝歳さん(1935年生まれ)がきびしい口調で語る。「建物ができて見た目はいいが、設立の原点を忘れ実学になっていない」と十数年前、酪農学園を改革するグループを結成し、経営陣の退任要求を突きつけたりした。そうした活動の流れのなかで、学園改革に手を挙げてくれたのが麻田理事長だったという。

札幌支部の加藤昭平さん(54年、酪農学園短大卒・薬局経営)は、「高校生や大学生、後援会員の卒業生を対象にアンケート調査を実施したり、札幌・江別市民の意向を調べ、それに基づいて校名変更の理論づけをしてはどうか」と理事者側に提案したが、一蹴されたと残念がる。

学園関係者らでつくる「アジア酪農交流会」の役員で由仁町の酪農家・細田治憲さん(1期生)は最近、交流会の会報に「内なる改革」と題したA4判三枚の一文を寄せた。

「校名変更によって幅広い志願者を募ることができる、という考え方は間違っていない」としながらも、「同窓生や後援会員の感情的な負のリスクが最大の問題になる。名前が変われば社会的信頼度が低く、愛着を感じてもらうには実績の積み重ねと時間が必要」と指摘し、学生の支援対策などを提案している。

「一番大事なのは教職員と執行役員の関係。それがうまくいくと学生や卒業生との関係も良くなり、おのずから志願者は集まる。大学は共同体であり、役員たちは一歩退き、下の意見を聞いてほしい」(細田さん)

卒業生で前北海道有機農協組合長の長良幸さん(石狩市在住)は、

「時代の流れで校名変更は必要かもしれないが、『残してほしい』という気持ちはある。ただ、学内にしこりを残すなら、いっそのこと学生たちに決めさせたらどうか」

と提案する。わたしが暮らす下川町の団体職員・尾潟鉱一さん(84年、酪農学科卒・東京出身)は、

「校名に愛着はあるが、こだわりはない。『三愛』を使うなら、その中身を周知していかないと中途半端になる。理念をきちんと示し、それを広めていくことが大事ではないか」

と注文をつけていた。

構内に立つ黒澤酉蔵の像。日本酪農の父と呼ばれ、「健土健民」を唱えた

「説明がない!」と学生が 理事者に訴え署名運動も

「大学共同体の成立」を教育目標に掲げた酪農学園大の構成主体である学生たちには、校名変更に関する公式説明はなされていない。校名を「北海道三愛大学」とする変更案を知った学生有志が二月一日、麻田理事長あてに反対の意見書と説明などを求める質問書を提出した。大学改革の一環で進む高大共同女子寮の建設や、短大と学科の廃止について、学生に対する説明がないことに対する不満が、その背景にあるようだ。

「理事会による大学改革の結果、学生・教職員のやる気の低下、優秀な職員が〝改革〟のために学生支援の現場から遠ざかるなど、大学全体に混乱を招いて

「酪農学園大学」の概要

「農民精神の作興」「酪農経営の実地教育」「産業組合主義の徹底」を旗印にして、1933年に設立された「北海道酪農義塾」が前身。創立者は足尾鉱毒事件の被害者救済のために闘った田中正造の門下生だった黒澤酉蔵。建学以来、キリスト教に基づく「三愛精神」による人間教育と、創立者が提唱した「健土健民」の理念による実学教育を柱にすえ人材育成に取りくんできた。

1960年に「酪農学園大学」を開学(酪農学部のみ。96年に獣医学部、98年に環境システム学部を設置)。現在は、酪農学部4学科、獣医学部1学科、環境システム学部4学科、大学院に2研究科がある。

学校法人 酪農学園は、大学(学生数3,474人)、大学院(同93人)、短期大学部(85人・11年度に廃止予定)、とわの森三愛高校(735人)を経営する(人数は09年5月現在)。文京台キャンパスのほか、道内各地に農場や山林あわせて846haを所有。08年度の収支状況は、大学は5億2,300万円の黒字、短大と高校は5,800万円、1億7,100万円の赤字になっている。

江別市文京台緑町582番地
TEL011-388-4138(代表)　FAX011-386-1220
http://www.rakuno.ac.jp

いる」と反対理由を示し、変更案のデメリットとして、

①全国的な知名度の低下、在校生や教職員・卒業生から学校への愛着を失わせる

②農村地域での知名度や信頼性が低下し、調査・研究活動に支障をきたす

③一般的な辞書で「三愛」は仏教用語として記述されており（キリスト教系の）本学に対する誤解を招く

④変更案では食や農に関心を持つ学生を獲得する機会を逃す

の四点を挙げている。

「意見・質問書」への賛同署名を募ると、一週間で全学生数の三割近い九百人あまりの署名が集まったと聞く。一連の動きには、大学の将来を案じる若者たちの真面目な思いが表れている。理事者や教職員はもっと真摯に耳を傾けるべきではないだろうか。

取材の結果、大学改革と校名変更をセットにした進め方に無理があったのではないか、と思えてならない。立派な大人たちが「大学に混乱を招いている」と学生から指摘されるようでは恥ずかしい話ではないか。

昨年の卒業生の一人が、「議論はかみ合っておらず、OBの話も現状を乗り越えるものにならない。志願者数は減少しており、建設的な議論ができる仕組みが必要だ」と語っていたことが印象に残る。校名問題より先に、本丸の大学改革のあり方をじっくり議論してはどうだろうか。

教育内容の検証を踏まえ農と食の応援団づくりを

初代学長の樋浦誠さんは、八五年の『酪農学園だより（第43号）』に二一世紀の大学像を提案している。そこには、人文学部やスポーツ学部の増設と道内各地への分校設置などによって、総合大学を建設する構想が示されていた。当時が酪農学園の隆盛期だったのかもしれない。

その後の四半世紀は、獣医学部人気や道外からの入学比率の高さなどの好条件に甘え、教育の原点が蔑ろにされてきたのではないか。建学の精神は風化し、キリスト教系学校としての特色も希薄になり、普通の農学系大学の一つになってしまった。

十五年前に他界したわたしの父親は、酪農学園短大の農家向け通信教育の受講歴があった。農業経済学科の特別講義で話をしたこともあり、大学関係者には好感を持っている。

半面、酪農・畜産教育のあり方には疑問が多い。創立者が唱えた循環農業の基本を忘れ、輸入穀物を依存する酪農を前提にした教育を推進してきた経緯もある（かつて肉骨粉などの給与を薦めた教授もいた）。

アニマルウェルフェア（動物福祉）や生命倫理についての教育・研究も不十分である。酪農家が創った大学にもかかわらず、近年は獣医師の資格を得た卒業生の多くが犬猫を扱い、大動物の臨床現場に進む人は一割程度と少数派だ。原点に戻ろうと奮闘する教員もいるが、課題は多い。

酪農団体の職員として長年にわたり道内各地の現場を歩いてきた、同大特任教授の須藤純一さん（74年、酪農学科卒）は、教員たちの資質に疑問を投げかける。

「これまでは、農業に対する問題意識が少ない、専門分化した研究者を集めてしまった。大学からの情報発信が少なく、現場の人が分かる原稿を書けない教員もいる。産業動物の獣医師をめざす学生の定員枠を決めるなど大学の使命を果たすべきだ」

人間教育を実践するには大学の規模が大きすぎるのかもしれない。

酪農学園は、デンマークの全寮制農学校をモデルにして創設された。せたな町在住の卒業生・河村正人さん（42年、山口県生まれ）は、在学中のデンマーク研修でこの農学校と出会い、若者たちが牧場で働きながら暮らす私塾「瀬棚フォルケホイスコーレ」を運営した（現在は閉塾）。何度か取材に訪れたことがあるが、そこには酪農学園大が忘れてしまった教育の原点があった。

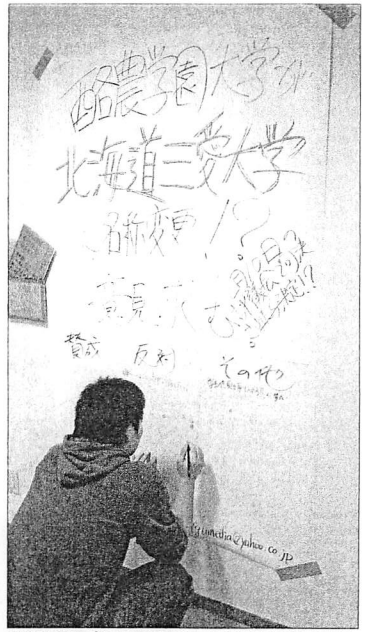
オホーツク海側の町で酪農を営む五十代の卒業生は、

「酪農学園の牛舎は『立ち入りは遠慮して』と掲示してあり、牛の病気が多く、飼料もお粗末だ。『循環型の酪農』を掲げているが、その中身は評論家。有機農業を唱えるなら、『僕らと同じレベルじゃなく、大学できちんとやれよ』と言いたい。フランスでは、国立の職業専門学校を田舎に設置して原産地認証のチーズなどを造り、WTO体制に対抗しようとしている。酪農大が農業を志向するならば、田舎でやるべきだ」

と、示唆に富む話をしていた。

都会の若者に農業への関心が高まっている。会社勤めを終え農的暮らしを志す人や、食のあり方を考える消費者も増えてきた。「農と食の応援団」のすそ野を広げることが急務であり、酪農学園大はその受け皿になりうる場所ではないだろうか。

専門分化した学習は社会人になってからでも出来る。創立の原点に立ち返り、土臭さのある大学改革をめざしてほしいものだ。



学生たちはポスターを貼り、名称変更についてアンケートを実施した（1月30日）

「三愛精神」で進める高大一貫教育

学校法人 酪農学園理事長
麻田 信二さん

少子化のなかで、日本の四年制私立大学は半数近くが定員割れになっています。酪農学園大学は、それに加え農家人口や酪農家の減少があり、今後やっていけない大変な状態です。規模を三分の一ほどに縮小するか、他の学園の傘下に入るのが一番楽な道です。学生の半分は道外出身者ですが、人口が集中している札幌の高校からはほとんどこない。道内の農業高校もなくなる一方です。高校生から“酪農の大学”と見られている限り、学生は集まらず、やっていける訳がありません。

そこでわたしは、理事長就任とともに、みんなの意見を聞きながら学園改革を始めました。とわの森三愛高校と酪農学園大学の両者が生き残るために高大一貫教育を選んだ。その結果、高校では〇八年度に比べ志願者や入学者も増えました。昨年秋の学校見学会の参加者や、推薦入試の志願者も増えた。みんなの頑張りによって、この二年あまりで進めてきたことが、数字に現れてきています。

※　※

大学改革を進める当初から、「大学の名前も聖域を持たずに検討しよう」と去年の春くらいから話をしてきた。議論のなかで、「大学教育の中身が変わるときに校名変更をすべきだ」という判断に至り、今日に至っています。

そして、一月二十五日の理事会に具体的な名前として「北海道三愛大学」を提案し、皆さんに判断してもらうことにした。それに対して（大学関係者から）意見をくれればいいし、評議員会ではほとんどの人が賛成してくれる、という見通しの下で提案しています。

（農業が軸の大学をイメージする名称は）基本的には入っていないほうがいい。それは経営者側の判断です。失敗しないと思っているし、やってみて、何があったら次の手を打つ、ということで進んでいきます。

建学の精神の原点に戻って現代に生きようと改革を始めた、その基本は三愛主義です。学園がよって立つ基盤は、黒澤酉蔵先生が唱えた、食料や環境問題のなかで協同の精神で世界平和をつくる人材を育成していくことであり、それ以上のものは何もありません。今、世界・日本・北海道で一番求められているものは、この三愛精神だと思う。

高大一貫教育で高校生にも関心を持ってもらい、黒澤先生が求めた創立の理念を世界に向かって発信していく。将来は、中国をはじめアジアの留学生を大量に受け入れるような学校にしたいと考え、寮の整備もやっています。僕は「三愛」があって良かった、と思っている。これ以上の名前はないし、現在よりも社会に受け入れられるでしょう。法人名には「酪農学園」が残るので、なんら支障はありません。

うちは、十八歳人口と農家・農村人口が減る二重苦にあり、校名を変えたからといって（志願者が）増えるという簡単なものではない。変えなければつぶれるだけです。なんとしても関東や関西からの学生募集対策をやりたい。

将来の拡充部門として、福祉のほか、心の問題やアニマルセラピー、園芸療法などを取り込んだ医療、グリーンツーリズム、水産関係も視野に入れたい。「北海道三愛大学」は最高の名前だと思っています。

（1月28日・談）

酪農学園大学の校名変更問題への提言

執行部は結論を急がず ボトムアップの議論を！

ルポライター　滝川 康治

先月号の「〝農と食〟北の大地から」でリポートした、酪農学園大学の校名変更問題が重要な局面を迎えている。学校法人の理事会が示した「北海道三愛大学」への変更案に異論が噴出。このまま理事者側が変更方針に固執すると、学内外にさらなる混乱を生じかねない状況だ。同大は、農業関係者や地域とのつながりが深く、運営には税金が私学助成として投じられているだけに、校名変更を提案した側には社会的責任を果たす義務がある。将来に禍根を残さぬ対応を求めたい。

（3月6日現在）

開設から半世紀の歴史を刻む酪農学園大学が校名変更をめぐって揺れている

トップダウンの提案に学内外から批判が噴出

少子化や大学の急増に伴う大学間競争の激化を背景に、私立大学の経営はきびしさを増す一方だ。特に、地方の小規模私立大の多くが学生不足に悩まされており、廃校に追い込まれるところも現れている。

江別市内にある酪農学園大学は、〝日本酪農の父〟と呼ばれた黒澤酉蔵が昭和初期に創立した「北海道酪農義塾」を前身にして、半世紀前の一九六〇年に開設された。現時点では黒字経営だが、農家人口や志願者数の減少もあり、今後の運営はきびしさを増していくのは必至だ。

運営母体の学校法人酪農学園（麻田信二理事長）は起死回生の策として、赤字経営が続く「とわの森三愛高校」と大学をつなぐ一貫教育の道を選択。さらに、「高校生から〝酪農の大学〟と見られている限り、学生は集まらず、やっていけない」（麻田理事長）と、昨年六月に校名変更の方針を示した文書を教職員に配布した。

麻田信二理事長

〝酪農外し〟の提案に対して学内外から、「大学の歴史やブランドを喪失させる」「進め方が強引だ」などの批判が噴出。一月下旬の理事会で「北海道三愛大学」が提案されるや、二月八日の全学教授会（135人で構成）で出席者九十八人のうち八十三人が反対の意思を表明。学生たちも、在学生の約三割にあたる千人近い反対署名を集めて理事者側に提出し、かつてない動きを見せた。

こうしたなか、二月十日には評議員会（職員、OB、学園役員、学識者で構成）が開かれた。「ほとんどの人が賛成してくれる」（麻田理事長）との見通しに反し、「半数の人は発言せず、残り半数のうち七割ほどの人が反対意見を述べた」（出席した評議員）。三月下旬の定例評議員会でふたたび協議されるが、決着はつきそうにない。理事のなかには少数ながら、反対意見や慎重な対応を求める声もある。麻田理事長らは役員の任期切れを迎える今年六月までに一定の結論を見いだそうとしているが、その道のりは険しそうだ。

同大には、樋浦誠初代学長の更迭に端を発した人事問題をめぐる紛争（64年）や、理事会が提起した学費値上げに対する学生自治会の反対運動（71年）など苦い歴史もある。学内外との合意形成をおろそかにすれば過去の轍を踏むことになりかねず、関係者の間にしこりを残す。賛否双方とも大学の将来を案じる思いは一致している。冷静に考えれば何が得策かは明らかだろう。

訴求力に欠け芳しくない「北海道三愛大学」の評判

理事者側が示した「北海道三愛大学」は、クリスチャンだった黒澤酉蔵が唱えた「神を愛し、人を愛し、土を愛する」の三愛精神にちなんだ変更案である。評議員会には、【1】建学精神の根本である「三愛」が入ることで伝統や歴史を継承できる。【2】とわの森三愛高校からの入学者を確保する上で効果が高い。【3】将来、福祉や医療、観光、水産などの分野を取り入れても違和感がない。【4】現名称を超えた印象が持て、普遍的に感じる――などを提案理由に挙げた。

が、この校名案の評判は芳しくない。関係者にとっては意義深い「三愛精神」ではあるが、校名から何を学ぶ大学なのか志願者や父母らに伝わらず、訴求力に欠ける印象は否めない。

ネットで検索すると「三愛」を冠し

広告チラシ・パート募集
・出前メニュー等の
ポスティングを承ります。
1,450名のミッドレディが札幌市内全10区の
お宅へ確実にお届け致します。
株式会社ミッド北海道
札幌市白石区北郷５条８丁目3-22
☎011-875-7061

た事業所は不動産や自動車、石油関連、ホテルと幅広く、医療関係も多い。その多くはキリスト教とは縁がない。鍼灸関連と歯科衛生士の専門学校を経営する学校法人札幌青葉学園では、「北海道三愛看護専門学校（仮称）」を一一年度以降に札幌市内で開校する準備が進む。「登別にある三愛病院との提携を前提に考えた名称で、キリスト教や酪農大とは関係ありません」（同学園事務局）。こうした状況下で「三愛大学」に変えても、どれだけ志願者の増加につながるのか心許ない。

「名は体を表す」という言葉がある。三愛精神を標榜するには、学内にその気風がみなぎることが欠かせない。しかし実態は、週に数回ある学校礼拝に教職員はほとんど参加しない、と聞く。これでは、校名と中身が一致しない結果になってしまう。

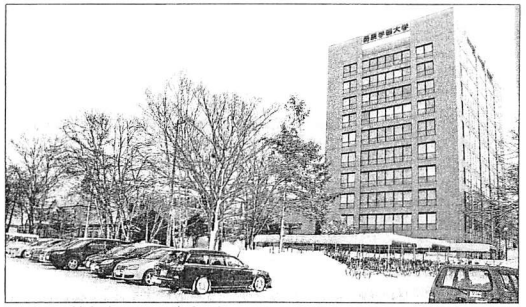
酪農学園大の建学精神は、健土健民・三愛精神・実学教育・循環農法の四つである。その一つを冠したいとの思いは理解できるが、変更に関わる多額の費用や新校名が定着するまでの苦労などを考えると、定着した名称を捨て、拙速な対応で今後にツケを残すことになりかねない。

他校の経緯も調査研究して将来に禍根を残さぬ選択を

民主主義は手続きが大事である。東京の日本獣医生命科学大学（日獣）は、〇六年度からこの校名に変わった。日本最初の私立獣医学校として百三十年前に創設され、変更前の名称は「日本獣医畜産大学」だった（経営主体は学校法人日本医科大学）。

まず、畜産学科の改称をめぐる教授会の議論に数年を費やした。背景には、農業や畜産に関わる学科に対する文科省の助成金が減少傾向にあることへの危機感もあったようだ。〇三年に獣医畜産学部が獣医学部と応用生命科学部に改組され、それを契機に校名変更の議論を始めた。

「当初は学生やＯＢは反対し、畜産学科の教員もかつての校名にこだわった。そこで受験生に対するアンケートを実施するなど、内部の議論に三、四年かけた。変更が決まったのは受験生の意向が大きく、全体を変えるまでに十年近くかけている。変更後、志願者は微増したが、学生の農業・農村に対する関心は薄くなってきました」と、校名変更を主張した教授の一人が解説する。



校名変更問題が重要な局面を迎えている酪農学園大学

日獣は、教授会で変更方針を決め、学校法人の理事会に提案するボトムアップの手法を採った。他大学から一周遅れで学部・学科の改組に向けた議論を始め、トップダウンで短期間に校名変更を進めようとする酪農学園大とは対照的だ。理事者らは、他校の手法にもっと学ぶといいのではないか。

「学園の役員たちは、教職員や学生に対する説明責任がある。このままでは、学生が集まらないことよりも、大学が内部崩壊することへの危機感を覚える。校名を変えるのなら、プロを入れてきちんと検討すべきだ」

「結論を急ぐ執行部の姿勢が学内でのすれ違いや不信感を生んでいる。校名をどう変えようと、教育内容や教員に魅力がなければ大学は衰退する。顧客（志願者ら）が大学のどこに魅力を感じているかを把握する――それが経営の基本ではないか」

と、現状を憂慮する同大の一期生たちが訴える。

教育目標に掲げた「大学共同体の成立」を実現するには、信頼関係の構築が不可欠だ。ここは、いったん校名変更案を凍結し、「魅力のある大学」にするために何をなすべきか、根本からの議論を重ねる場をつくることが必要ではないか。

そこでは、受験生のニーズの調査・分析をはじめ、教員の発信力の強化や環境システム学部の見直し、動物福祉や生命倫理などの教育研究、獣医師養成のあり方、地域とのつながりや社会人学生の可能性、就学支援の方策――などを議論し、校名変更の是非を判断していけばいい。手詰まり感が漂う今、その好機が訪れているように思う。